
魔法少女リリカルなのは～誇り高き竜に仕えた者～

語り部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜誇り高き竜に仕えた者〜

【Nコード】

N4868S

【作者名】

語り部

【あらすじ】

本来在りえなかつた死の形……その結果死んでしまった少年は神と出会い、並行世界の自分と融合して別の世界に転生する。誇り高き槍の使い手はその世界で何を為すのか……

プロローグ（前書き）

考えた末になのは小説を投稿しました。

駄文ですがよろしく願います。

感想を頂けると嬉しいです。

プロローグ

「ここは……？」

何もない空間で少年は眼を覚ます。

「俺は……どうしたんだ？」

周りを見回すが何もない。そして少年はあることを思い出した。

自分はどこにでもいる普通の高校生だった。人より多少無口ではあったが友達もそれなりにいた。

そんな彼がある日、友達と学校から帰る途中で通り魔に出くわした。そして彼は友達を庇い……

「俺は……死んだのか……」

不思議と悲しみはなかった。彼と家族との仲は非常に冷え切っていて心が許せるのは数少ない友達だけだった。

その友達も自分が刺されて倒れるとき、『必ず助けを呼んで戻ってくる』といって走って行ったのを覚えている。

通り魔の凶器は自分に刺さったままだった事は覚えてる。ならば友達は助かっただろう……

彼はそう考えるだけでほんの僅かに満足感を得ることができた。これ以上友達と一緒に居れない悲しさはあったが……友達を失うより

は遙かにマシだった。

「エゴ……だな……」

そう……それはエゴだ。もしかしたらその友達は自分が死んだことで悲しんでいるかもしれない。自分が味わったかもしれない悲しみに沈んでいるかもしれない。それでも……

「死んだものはしょうがない……か……」

そう結論付けよとした時だった……

「ほっほっほ、友の為に命をかけようとは……今時珍しい若者じやのう」

少年の目の前に1人の老人が現れた。

「……なんだ、あんたは？」

「お主……転生してはみんかのう？」

その老人の言葉に眼を見開いた。聞くところによるとその老人は神であり、その住居……所謂『天界』ではいろいろと娯楽が不足しているらしい。

そこで死んだ人間の中から転生者を出し、その生き様を楽しもうと考えているらしい。

「はっ、随分と勝手な理屈だな？」

「ほっほっほ、それが神じゃ。諦めい」

呆れたように笑う少年と老人。そして老人は少年に結論を促す。

「さて、お主に聞きたい。転生するか否か……もしも転生するならば『ある男』と融合してもらい、別の世界に転生してもらおう。否ならば輪廻の輪に戻って生まれ変わり待ちじゃ」

「『ある男』ってのは何者だ？」

「簡単にいえば並行世界のお主じゃな。お主がいた世界とは全く別の世界のお主……しかも運がいいことに最強クラスの戦士じゃぞ？」

説明しながら老人は子供のように笑っている。

「融合したら俺はどうなる？」

「その男とお主の人格が融合した新たな存在となる。ただしお主の記憶もその男の記憶も両方とも引き継ぐがのう」

「ようするに俺が俺じゃなくなるわけか」

少年は考え込むように黙り込む。

「ほっほ、臆したかのう？」

「冗談……OK、その提案乗ってやるよ。せいぜい天界とやらで見てるんだな」

少年は老人に向かって笑顔を向ける。それを確認した老人も満足げ

に自身の髭を撫でる。

「うむ、では選別にお主が使う武器とは別にもう一つ武器を持たせよう。お主が認めた相手にでも渡してやるがよい」

その言葉を最後に少年の意識はブラックアウトした。

「さてさて……お主の物語…期待させてもらおうかのう……まあ、向こうの世界にお主に勝てる者はそうそうおらんじやるのが……」
「応向こうにも転生者があるからのう……ふおふおふお」

後に残った老人は満足げに笑顔を浮かべ、その場を去って行った。

第1話 転生から1年……介入開始（前書き）

第1話連投です。

駄文ですがよろしくお願いします。

感想頂けると嬉しいです。

第1話 転生から1年……介入開始

|| SIDE : ? ? ? ? ||

俺が並行世界の自分と融合してから1年の月日が経った。まず俺が飛ばされた世界がどこのかはすぐにわかった。

『魔法少女リリカルなのは』……学生だった頃の俺が友に見せられたアニメの世界……いや、この場合そのアニメによく似た並行世界と言つべきか……

そう結論付ける理由になつたのはあの神が言った『並行世界の俺』……もとい戦士として生きた俺も学生として生きていた頃の俺が漫画で読んだ人物だったからだ。

融合した後は俺の中に流れ込んできた記憶から戦士として生きた俺が誰なのかを理解し、そしてそれ以来旅を続けている。

この世界には管理局と言うものがあるが俺は管理局に入局する気はなかった。

理由は2つ……1つは俺が人間ではないからだ。俺の肉体のベースは戦士として生きた俺であり、俺の肉体は人間のそれではなくなつた。

俺の肉体は水色の肌の色で金色の肩辺りまでの髪。耳は尖っていて眼の下には黒い爪のような紋様がある。

それ以外は人間と大差ないがやはり好奇の目にさらされるのは確実

だろう。

もう1つの理由……主にこっちがメインだが俺は『あの方たち』以外の命令を聞く気がないということだ。

学生として生きていた頃の俺は漫画の中で『あの方たち』を知り、呼び捨てにしていたのだが……戦士として生きていた俺が『あの方たち』呼び捨てにするなど恐れ多いと置いて融合してから呼び捨てで呼んだことなど1度もない。このことから俺のベースが戦士として生きていた俺だということが分かる。

もっとも、そのことに不満などあるはずもない。どちらにせよ融合することを選んだ時点で俺が俺でなくなるなどわかりきっていたのだから。

「グルル……」

「む？どうした？」

俺の足元から唸るような声がある。そう、俺は1人旅をしているわけではない。俺は1匹のドラゴンに乗って旅をしていた。

このドラゴンは神からもらった選別の1つで俺が目覚めた場所で俺を待っていた。……その際、俺が寝ていたのが棺桶の中だったのは複雑だったが……

俺が乗っているドラゴンは翼を持たず、走るのが速い陸上タイプのドラゴンだった。

他に選別として用意されていた荷物の中には明らかに俺が使うもの

とは別の武器が1つと戦士として生きていた俺がいた世界の魔法の事が書かれた呪文書だった。

「グルルル……」

そしてこのドラゴン……俺はヒュードと命名……はある洞窟を見ていた。ヒュードは人間や俺よりも鼻が利く。何かを感じ取ったのだろうと考え、俺は洞窟の前まで寄ってきた。そこで気付いたが洞窟内からかすかに血の匂いがする。すると俺はヒュードと共に洞窟の中に侵入していった。

|| SIDE END ||

その頃、洞窟の奥深くでは銀髪の少女と大柄な男性が向かい合っていた。男性は右手に槍を持ちながらも傷を負い、片や銀髪の少女も肩で息をしている。

この洞窟……入口こそ洞窟だったが内部は一種の研究施設だった。その大柄な男性は傷口を抑えながら少女を睨みつけている。

「（く……メガー又たちとの通信はできん……か）」

少女と対峙している男性……ゼスト・グランガイツは管理局の局員だった。捜査してきた戦闘機人事件の施設に踏み込んだ彼だったが……待っていたのは戦闘機人の少女と大量の兵器群による襲撃だった。

兵器が使用したAMFアンチ・マギリンク・フィールドによって多くの部下が戦闘力を失い、次々と倒れて行った。

彼自身も部下を庇って負傷し、眼の前の少女に追い詰められているのが現状である。

「だが……ただでは……」

ゼストが最後の攻撃に移ろうとした時、突然目の前の少女に通信が

入った。

『チンク！今そっちに新しい侵入者が向かっているわ！気をつけて
』！』

通信画面に映ったのは薄紫色の髪の女性。その女性の言葉にチンクと呼ばれた少女は改めてゼストに向き直る。

一方のゼストも多少混乱していた。新たな侵入者と言うことは自分の部下たちではない。ならば他の部隊か？とも考えたが自分たちは『秘匿命令』で動いていたので自分たちの行動を知っている者はあまりいない。

「悪いが……これで終わりにさせてもらおう！」

そう考えていたゼストの眼前にチンクが手に持っていたナイフ……ステインガーを投げつける。ゼストは自分に迫りくるステインガーを防ごうと身体を動かすが……

「「なっ！？」」

それよりも速くゼストの背後から飛び出した影がステインガーを全て弾き飛ばしていた。

そしてゼストの眼前には金色の髪に物々しい装飾が付いた槍を持つ青年が立っていた。

「SIDE:????」

洞窟に入ってから目にするのは管理局の制服を着た者たちの死体だった。幸い戦士としての俺はこういった光景に慣れていたので動揺しないですんだが……

さらに内部は外と打って変わって何らかの研究施設であることは理解できた。さらに途中には何機か機械兵器を破壊したがそれを見てここが何の施設なのかを理解した。

「ガジェット・ドローン……」

それは『リリカルなのは』の第3期の敵が使っていた兵器の名称：
…それがここにあるということはこの施設はそいつのものである可
能性が高い。

「む？」

そうしてしばらく進んでいくと視界に大量の兵器が何かを囲んでい
るのが見えた。よく見ると女が2人、囲まれているらしい。

しかも驚くことにその2人ともが見覚えがあった。たしか原作に出
ていた人物のはずだ。

俺は自身の武器である槍を構えると2人を囲んでいたガジェットを
全て両断した。別段、助ける義理はなかったが見過ぎすのも寝覚め
が悪い。

「あ、あなたは？」

女の1人が俺を見てくるがこいつらがここにいると言つことはこの
先にはあの男がいる可能性が高い。

「説明はあとだ」

俺はそう言つと2人をヒュードに乗せ、先を急ぐ。しばらくすると
すぐに大柄な男が銀髪の少女と対峙しているのが見えた。

しかも少女は男に大量のナイフを放つ直前だった。俺はそれを察知
するとすぐに男の前に出て槍で全てを弾き飛ばす。

「っ！？な、何者だ！……」

眼の前の少女と背後の男から視線が突き刺さる。

「お前は……いつたい？」

背後の男からも疑問の声が上がる。俺の名前……すでにこの世界に
来た時点で学生として生きていた頃の名前は捨てた……だから俺は
戦士としての俺の名前を名乗る。

「陸戦騎ラーハルト、推参！」

今ここに……誇り高き竜騎衆最強の男が次元世界でその槍を振るう。

キャラ設定(前書き)

タイトルの通りです。

キャラ設定

キャラ設定

名前：ラーハルト

年齢：14歳（現時点の肉体年齢）

人種：魔族と人間のハーフ（ベースがラーハルトのため）

装備：鎧の魔槍（最終形態）、竜騎衆時の服

持ち物：『ダイの大冒険』の世界の全ての呪文が記された呪文書、
本人が装備できない武器（現段階では不明）

詳細：通り魔によって死んだ高校生の少年が並行世界の自分「ラーハルト」と融合した姿。ベースがラーハルトの為、性格はほとんどがラーハルトと同一。ただし微妙に違う部分もある。少年の方が『なのは』の原作知識を持っていたために飛ばされた先の世界感にはさほど戸惑いがない。

移動時はドラゴンのヒュードに搭乗する。ちなみにヒュードのデザインは原作でラーハルト初登場時に乗っていたドラゴン。ヒュードの戦闘力は真の姿になったフリードと同程度で『なのは世界』ではフリードが飛竜と呼ばれるのに対し地竜と呼称される。

本人は管理局に所属する気はまるでない……と言つか鎧の魔槍は質量兵器なので所属できない。また、ラーハルト自身がバランとダイ以外の命令を聞くつもりはない。

ベースとなったラーハルトの影響でバランやダイのことを『様』付けで呼んでいる。

ちなみにオリ設定として本来魔族は人間よりも遙かに長命だがライハルトは混血なので人間よりも多少長いくらいの寿命である。

第2話 同じ眼（前書き）

更新です。

初めに言っておくと本小説のスカリエッツィは個人的に良い人です。原作とはまったく違います。

駄文ですがよろしく願います。

感想をいただけると非常に嬉しいです。

第2話 同じ眼

「……………」

研究所の一室、そこでは重苦しい雰囲気に包まれていた。

部屋に設置された2つのベッドには身体中に包帯を巻いた2人の女性が寝かされていた。その女性たちの名はクイント・ナカジマとメガーヌ・アルピーノ。ラーハルトがガジェットに囲まれているところを助けた女性たちである。

さらにすぐ近くの椅子には頭に包帯を巻き、左腕を首から布で吊るしているゼストの姿がある。

その近くにはゼストと対峙していた銀髪の少女、チンクが申し訳なさそうに俯いており、その横には紫色の髪の男性とさらに4人の女性たち。

そしてそんな彼らを観察するように魔槍を立て掛け、腕を組んで壁に寄りかかるラーハルト。この状況になった原因は数時間前に遡る。

「陸戦騎ラーハルト……推参」

チンクの放ったステインガーを全て弾き飛ばしたラーハルトはゼストの前に立っていた。

「陸戦騎……」

「……ラーハルト……」

ラーハルトが名乗った名前をチンクとゼストが口ずさむ。

「隊長！」

するとヒュードに担がれていたクイントが声を上げる。

「クイント、メガーヌ！」

2人の姿を確認したゼストは傷の痛みを耐えながら2人に近付いて

いく。

「2人とも無事か？」

「なんとか……彼のおかげで……」

「けど、他のみんなは……」

「……そうか……」

ゼストの問いにクイントが答え、メガーヌが悲しそうな声を上げる。するとゼストたちはチンクと対峙しているラーハルトに視線を戻した。

「彼は……いつたい？」

「わかりません……敵じゃないと思いますけど……」

一方、いきなり目の前に現れ、自分の邪魔をしたラーハルトを睨みながら再びステインガーを構える。

「……やめておけ……お前では俺を捉えることはできん。大人しくこの主のところ案内しろ」

ラーハルトはチンクを見据えながら至って冷静に言い放つ。だが、そのラーハルトの物言いに当然チンクの顔は怒りに染まる。

「あまり私を舐めぬことだ。命取りになるぞ？」

チンクはラーハルトを睨むながらステインガーをいつでも投げられる体勢になる。

「なら……試してみたらどうだ？」

「っ！舐めるな！！」

ラーハルトの言葉にチンクは両手に持っていた計6本のステインガーをラーハルトに投げる。そのステインガーは寸分違わずラーハルトに向かっていき……そしてラーハルトの身体を通り過ぎた。

「……なっ!?!」「」「」

その光景にチンクとゼストたち4人は驚きの声を上げる。

「わかったか？」

チンクの背後から声が響く。そこには魔槍をチンクの首元に向けたラーハルトの姿があった。

「攻撃の当たらない相手に……お前は勝てるか？」

自信満々に喋りかけるラーハルトにチンクは愕然とし、明確な力の差を感じ取った。

ちなみにラーハルトがしたのは至極単純。超高速で動き、チンクの背後に回っただけだ。ステインガーがラーハルトの身体を通り過ぎたのはラーハルトが移動した後に残った残像だったに過ぎない。

もつとも、ラーハルトはこれでも本気を出してはいないが……

「（勝てない……このスピード……トールよりも遥かに速い………
…それでも!）」

実力差を感じながらもチンクは再びステインガーで背後のラーハルトに攻撃を仕掛けようとする。

『待ちたまえ!』

だが、そこに突如紫色の髪の男性が通信を繋げて来た。

「っ!?!ドクター!?!」

その通信画面に驚愕の表情を浮かべながらチンクが凝視する。一方、ラーハルトは大して驚いた様子もなく男性を見据える。

「（ジエイル……スカリエッティ……）」

通信画面に映った男性を見てラーハルトはすぐに本人だと確信する。

『チンク……彼らを連れてきたまえ』

「ドクター!……了解です……」

チンクは反論しようとするがスカリエッティの考えを理解し、チン

クはラーハルトたちを連れて研究所の奥へ進んでいった。

その後、ゼストとクイント、メガー又はスカリエツティたちに手当てを受け、そしてスカリエツティたちの正体をゼストたちは聞かされ、今に至るのだった。

「そんな……」

「管理局が……」

クイントとメガー又はスカリエツティたちから聞かされた事実には愕然としていた。ゼストも顔には出していないが十分驚いている。

スカリエツティが説明したのはスカリエツティ自身が時空管理局最高評議会によって産み出された人工生命体であること。

戦闘機人計画はその最高評議会の依頼で行われていたこと。今回のゼストたちの襲撃もあらかじめ最高評議会から通達されており、そこで戦闘機人やガジエットの性能を示すことになっていたことだっ

た。

最初は信じられなかったクイントたちもスカリエッツィたちが持つていた会話データなどの証拠品を見せられ、信じざるを得ない状態になった。

「……………それで…お前たちは何をしようとしているんだ？」

「私たちはナンバーズが全員稼働したとき……………管理局に反旗を翻すゼストの質問にスカリエッツィは静かに答える。その顔は真面目な顔で……………しかしどこか罪悪感を感じさせる顔だった。

「私はナンバーズを……………娘たちを管理局の駒にはしたくない。この子たちにも……………そしてこれから産まれてくる子たちにも幸せになってほしい。そして……………そのためには管理局を討つ以外に……………ない」

確かにたとえ逃げても管理局はどこまでも追ってくるだろう。結局逃走生活が始まるだけで安息などとは程遠い。だからと言って管理局に投降しても恐らく管理局への協力を要求されるだろう。沈痛な面持ちのスカリエッツィにラーハルトはある確信を持つ。

「（やはり並行世界か……………あのスカリエッツィとは違うようだな……………）」

『あのスカリエッツィ……………それはラーハルトが知識として知っている狂気の科学者としてのスカリエッツィの姿。しかし目の前のスカリエッツィがそうでないということにラーハルトは確信する。ラーハルトにはスカリエッツィが嘘を言っていないということは目を見ればわかることだった。』

「……………それで……………俺たちをどうするつもりだ？」

続けて投げかけられるゼストの質問にスカリエツティは真っ直ぐに答える。

「……………できるなら、このまま大人しくしてほしい。大人しくしていただけるなら危害は加えないと約束する……………全てが終わったら必ず開放する……………」

頭を下げながら言葉を紡ぐスカリエツティにクイントとメガーヌは顔を見合わせる。自分たち以外の隊員たちを殺したのはスカリエツティだ。

しかし根本的な原因は時空管理局にある。スカリエツティを憎む気持ちはあるが……………だからと言って素直に管理局に戻ろうという気にもなれない。

特にクイントとメガーヌには子供がいる。子供に幸せになってほしいという思いは非常に理解できるのだ。

「……………詭弁だな」

だが、今まで沈黙を保っていたラーハルトが口を開いた。

「っ！？貴様！」

ラーハルトの言葉を聞いて青い短髪の女性……………トーレがラーハルトを睨みつける。いや、彼女だけじゃない。チンクや薄紫色の髪の女性……………ウーノに眼鏡をかけた女性、クアットロ。水色の髪の少女セイ

ンに茶髪の髪の少女ディエチもみんなラーハルトを睨みつけている。

「管理局に反旗を翻すとしても、その過程でさらに多くの犠牲が出るだろう……そしてその手を下すのは結局前線で戦う貴様の娘たちだ。科学者である貴様はその手を汚すことはないのではないか？」

その問いかけに誰も答えられないものはいない。スカリエッティは確かに娘のことを思っているのかもしれない。しかし現実、その手を汚すのは娘であるナンバーズだ。

スカリエッティ自身は科学者であり、デバイスがあれば多少戦えるだろうが主力として戦うのはナンバーズになるだろう。

「……確かにその通りだ。私は前線では戦えない……そして娘たちに血を流させるだろう……だが……だからこそ私は私の持てる全てで娘たちを支え、共に背負って行くつもりだ。そのためなら……命を賭けることすら厭わない」

スカリエッティは立ち上がり、真正面からラーハルトを見る。

「そうか……」

それを聞くとラーハルトは魔槍を片手に持ち、スカリエッティに近づく。

「貴様……なにを!？」

ラーハルトの行動にトーレたちが身構える。それを気にせずラーハルトは魔槍を逆手に持ち、スカリエッティに向かって魔槍を投げられる形になる。

「命を賭けると言ったな？……では、その覚悟を試してやる………！」

その言葉と共に魔槍はラーハルトの手を離れ、スカリエッティに直進する。

「っ!？」

投擲された魔槍にスカリエッティは貫かれる覚悟をする。しかし……

ドガッ!

投擲された魔槍はスカリエッティの横数センチを通過し、壁に突き刺さった。

「……なぜ……？」

ラーハルトの行動に疑問符を浮かべるスカリエッティ。一方のラーハルトは無言でスカリエッティの横を通って魔槍を壁から引き抜く。

「貴様が逃げようとしたら串刺しになるように投げた………どうやら、覚悟は本物だったようだな」

それだけ言うとラーハルトは魔槍を手に部屋の扉の前に立つ。

「俺は誰かの『命令』を聞くつもりはない。だが………」

ラーハルトは言葉を区切り、顔だけをスカリエツティたちに向ける。

「『頼み』なら聞いてやらんこともない」

それだけを言い残し、ラーハルトは部屋を出て行った。

「……………ふふ……………彼……………素直じゃないわね」

そんなラーハルトの態度にクイントは笑顔を浮かべる。

「……………スカリエツティ、俺もお前に協力する」

「……………騎士ゼスト」

驚いた表情でスカリエツティはゼストを見る。

「確かに俺の部下たちはお前たちに討たれた……………だが……………その元凶は管理局だ……………だからこそ俺は問いたい……………レジアスに……………かつて俺たちが語り合った正義はどこに行ったのかと……………そのためにはお前に協力するのが1番手っ取り早い」

「……………そうか……………」

スカリエツティは納得したように頷く。するとクイントとメガーヌも口を開いた。

「私も協力するわ」

「私もよ」

クイントとメガーも協力を申し出たことにスカリエッツィはさらに驚く。

「みんなを殺したあなたたちは許せない……けど、娘のために命を賭けようとするあなたの気持ちは解らないわけじゃない」

「だから私たちも協力するわ。正直、もう管理局に居る気にもなれないし」

クイントとメガー又はそう答える……しかしクイントには管理局に夫がいるし娘たちもいる。そのことをゼストが訊ねるが……

「わかってる……でも、あの人ならわかってくれるわ」

クイントはそれだけ応え、決意の眼差しをスカリエッツィたちに向けていた。

一方その頃、部屋を出たラーハルトはヒュードのもとに置いてある荷物を取りに戻っていた。

「（並行世界の俺と融合したからか……俺もずいぶん甘くなった……だが……）」

ラーハルトは歩きながらスカリエッティの眼を思い出す。

「（スカリエッティのあの眼……あれは balan 様がダイ様を思っているときと同じ眼だった……）」

彼はラーハルトとしての記憶の中にある主であり、父のような存在であった balan を思い出す。

そしてラーハルトは自分の進む道を選んでいた。

第3話 特訓風景（前書き）

更新です。ちなみにダイの世界の呪文はなのは世界の魔法とは根本から違う設定になっています。

たぶん次回あたりヒロインが登場するかと……

よろしければ後書きもどうぞ

感想お待ちしています。

第3話 特訓風景

ラーハルトがスカリエッツィのもとに来てから数週間。まずラーハルトがやったことは現在目覚めている中でドワーエを除くウーノ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、デイエチたちナンバーズに自分がかつて生きた世界……。『ダイの大冒険』の世界の呪文を教えることだった。

……といつてもラーハルトが神からもらった選別のうちの1つである『ダイの大冒険』の世界の全ての呪文が記された呪文書を貸し出したただけなのだが……。そもそもラーハルトは呪文で戦う戦士ではない。使えるのはせいぜい移動用の『瞬間移動呪文』と味方と合流するための呪文である『合流呪文』^{リリッラ}ぐらいだ。

もつとも、これらの呪文は魔王軍に所属していたほとんどの者たちが使用できていた。使用できなかったのは元魔王軍であり、後に勇者ダイたちの味方になったクロコダイやヒュンケルぐらいだ。

ラーハルトは唯一、バランのもとに素早く馳せ参じるためにこれらの呪文を覚えたが、もともと素質がそれほどなかったのかこの2つ以外の呪文は覚えていない。

さて、実はこの『ダイの大冒険』における『呪文』は『なのは』の世界の『魔法』とは根本的に違う。魔法はリンカーコアがなければ使用できないが呪文はそういうわけではない。

呪文に必要な『魔法力』は大概の人間や魔族に備わっており、一部の例外を除き正式な手順を踏めば大概の人間が魔法を使える。

勿論、才能によって向き不向きがあり、中にはヒュンケルのように魔法が使えない人間も存在する。だが少なくともこの世界の魔法よりは多くの人間が使えるだろう。

「行くよ〜ヒヤダルコ!」

そうしている間にナンバーズはスカリエツティが作ったガジェットを基にした的に呪文の練習を行っていた。セインの放ったヒヤダルコは的に当たり、的を凍らせる。

「よし!」

上手く呪文が出たセインがガッツポーズをする。いろいろと試したところ、ナンバーズの面々の得意な呪文がわかってきた。

言うまでもなく呪文が使える中でもさらに得意な呪文や才能的に使えない呪文がある。例えるならポップは火炎系呪文が得意だったし、マームは初級中級の回復系呪文が使えたが攻撃呪文は使えなかった……という具合にだ。

それぞれのナンバーズの得意呪文はまずウーノが回復系呪文や解毒呪文などの回復系補助魔法。

トーレは攻撃倍加呪文や速度上昇呪文のような身体強化の補助呪文。

クアットロは現段階でもっとも才能があるらしく火炎系、氷雪系、真空系呪文の他に最近では変身魔法も習得した。

チンクはどうも爆裂系呪文が得意であるらしく、セインは氷雪系、デイエチは閃熱系呪文の習得が早かった。

どうにもそれぞれの戦い方に合っているような気もするが気にはいけなない。ちなみにチンクはラーハルトが乱入したのが早かったので両目共に健在である。

「ふう……」

そんな呪文の特訓に勤しむナンバーズを尻目にラーハルトは自身の槍の鍛錬を続けていた。ラーハルトはナンバーズの呪文の特訓が終わるとウーノを除くメンバーでラーハルトと模擬戦をする。

「ラーハルト殿、一手手合せ願います」

「チンクか……」

そうやってチンクを筆頭トーレたちも近付いてくる。どうやら呪文の特訓を終え、ラーハルトとの模擬戦に来たらしい。

ラーハルトはスカリエツィのもとに身を置いてからそれなりにナンバーズやゼストたちと仲が良かった……と言ってもラーハルト自身が寡黙な男なのでそれほど喋るわけでもない。ただスカリエツィとのやり取りからラーハルトは『素直ではないが優しい』という印象がついているのだ。

「いいだろう……さあ、こい……」

ラーハルトはチンクの言葉に頷くと魔槍を構えてチンクたちと相対する。この模擬戦はラーハルトは基本的に当身による攻撃のみ、全員負けを認めるか気絶させれば勝利。

一方、チンクたちは自身の戦闘技能と呪文を駆使して闘う。現段階ではまずラーハルトに魔槍を装備させることが目標になっている。

「では始めますわよ！」

クアットロの言葉と共にトーレが飛び出す。

「ピオリム！」

トーレが自身に魔法をかけるとトーレのスピードが上がり、ラーハルトに迫る。

「はぁ！」

トーレが拳を繰り出すがそれをラーハルトは的確に攻撃を受け流す。

「中々に速くなったが……まだだ！」

「トーレだけではない！」

攻め続けていたトーレの背後からチンクが飛び出し、ステインガーを投げる。

「それでは俺を捉えられんぞ……」

その言葉通り、ラーハルトは持ち前のスピードで軽くステインガーを避ける。しかし……

「貰いましたわ！」

「行くよ！」

ラーハルトが避けた方向にクアットロとディエチが待ち受けていた。

「メラミ！」

「ベギラマ！」

クアットロが放った火の玉とディエチの放った熱線がラーハルトに直進する。

「その程度で……」

だがそれもラーハルトは容易く回避する。……と、ここでラーハルトは1人足りないことに気づく。

「（セインがいない……なるほど……）」

「ここだよ！」

次の瞬間、ラーハルトの背後からディープダイバーで床に潜っていたセインが飛び出す。

「ヒヤダルコ！」

セインの両手から大量の冷気がラーハルトを襲う。

「甘いな……」

「っ!?!?」

ラーハルトが言葉を発した瞬間、セインのヒヤダルコはラーハルトの身体を通り抜ける。以前、チンクに用いたものと同じ残像だ。本体はすでにセインの背後に回っている。

「…奇襲をかけるなら呪文を唱える前に声を出すな」

そう言いながら魔槍をセインに突きつける。

「へへ、私で終わりじゃないよ？」

セインがそう言うとラーハルトの周りに無数のクアットロやチンク、トーレにデイエチの姿が現れる。その間にセインは再びディープダイバーで床に潜った。

「シルバーカーテン……クアットロか……」

そう、これは幻覚を作り出すクアットロのIS、シルバーカーテンだ。

「行きますわよ！」

その言葉と共に全てトーレ以外の幻影がラーハルトに両手を向ける。もちろん幻影が攻撃できるわけではないが目晦ましにはなる。

「メラミ！」

「ヒヤダルコ！」

「ベギラマ！」

「イオラ！」

さらにディープダイバーでラーハルトの上の天井から出現したセイ
ンも加え、クアットロがメラミを、ディエチがベギラマを、チンク
がイオラを、そしてセインがヒヤダルコを同時に放つ。

そして……………着弾した……………

「……………ねえ、これって死んでないよね？」

4つの魔法の同時攻撃によって発生した大量の砂塵を見ながらセイ
ンが呟く。

「大丈夫だと思うわよ、ラーハルトさんの強さは規格外ですから」

「規格外で悪かったな」

「……!?」「……」

クアットロの呟きにラーハルトが背後から答える。すでに魔槍をクアットロに突きつけていた。

「で、まだ続けるか?」

「……降参ですわ」

ラーハルトの言葉にクアットロが両手を上げ、他の4人もその場に座り込む。

「あゝ、負けたか……あれだけやったのに傷1つついてないし」

セインが不満気に呟く。まあ、それも仕方がない。ラーハルトはもともスピードを鍛え上げたタイプの戦士。その本質は回避して攻撃である。かつていた『ダイの大冒険』の世界でも彼の速さに対応できるのは恐らくダイやバーンといった最強クラスのものたちのみだろう。

「だが今回ののは悪くなかった……もともと、あの程度ではまだ俺を捉えることは出来んがな」

「それは褒めてるの? 貶してるの?」

相変わらずの自信満々なラーハルトの物言いにディエチが呟く。

これがスカリエッティのもとで暮らすラーハルトの生活の一部だった。

第3話 特訓風景（後書き）

というわけで第3話でした。

ラーハルトがルーラやリリルーラを使えるのは独自設定です。

原作でも「魔法はあまり得意ではない」とは言っていましたが使えないとはいつてなかったのです。

第4話 ヒロイン登場、9番目の少女(前書き)

久々の更新になってしまいました。申し訳ないです。

今回はヒロインが登場します。まだ子供ですが。

彼女はこれから先、かなり強くなります。

感想お待ちしております。

第4話 ヒロイン登場、9番目の少女

「だああああああ！！」

ラーハルトがスカリエッティと協力関係になって約2年が経過した。スカリエッティの研究所にある訓練室。そこには1人の少女の咆哮が木霊していた。

「どうした、その程度では捉えられんぞ」

その少女と相對しているのはスカリエッティと協力関係にあるラーハルト。そして少女は赤いショートカットの髪と金色の瞳が特徴的なナンバーズの9番目、名前をノーヴェという。

彼女とラーハルトが出会ったのは2週間ほど前のこと、ラーハルトはスカリエッティに呼び出されて訓練室に来ていた。

「スカリエッティ、何の用だ？」

鎧の魔槍を担ぎながらスカリエッティの隣をラーハルトが歩く。

「ああ、最近新しい娘がようやく目覚めてね。君にも紹介したかつ

「ただよ」

ちなみにこのスカリエッティ、ラーハルトに誰かナンバーズの1人を嫁がせたいとか考えていたりする。そのため、ナンバーズが目覚めると率先してラーハルトに紹介しようと心に決めていたのだ。

ラーハルトは一応魔族と人間のハーフで半分とはいえ人外の血が流れている。……のだが、スカリエッティはそういうことは気にしないらしい。

「その子はノーヴェと言ってね。今はチンクが教育係をしているんだよ」

「（なるほど…ノーヴェか…）」

一方のラーハルトは当然知識としてノーヴェのことは知っている。しかしこうして実際に会ってみてチンクが妹たちの世話をしているのは良い人選だとラーハルトは考える。

やはりスカリエッティの人柄が原作と違うからか他のナンバーズも若干性格が違うものがある。特にクアットロから上のナンバーズはその違いが顕著だった。

だがウーノはスカリエッティのサポートで忙しく、ドゥーエは管理局への潜入で不在。トーレは訓練などではとにかく世話などは若干不向き。残るのはクアットロとチンク、デイエチにセインだが、クアットロもウーノほどではないにしる頭脳労働派なのでスカリエッティのサポートをしている。

その結果、残る3人で最年長のチンクが新たに目覚めたノーヴェの

世話をし、セインとデイエチはその手伝いをしている。まあ、見た目ではチンクは最年少なのだが…『サクッ』……うっ！……『バタッ』

「ん？どうかしたかい？」

「いや、どうやら作者がチンクに刺されたようだ」

「？まあいい、ここだよ」

メタな発言をしてしまったラーハルトに疑問符を浮かべたスカリエツティだが、気にしないことにして訓練室の扉を開けた。そこにはチンクとクイント、そして赤い髪の小柄な少女、ノーヴェエがいた。

「（原作で見たよりも小さいな……）」

ラーハルトが最初に持った印象がそれであった。確かにノーヴェエの身長はチンクとだいたい同じくらいしかなく、原作と違って女性的な凹凸がほとんどない。

だが考えてみればそれも当然のことだった。今はStrikersの原作から6年前である。そのため現在のノーヴェエの年齢はだいたい9歳ぐらいなのだ。

「なぜクイントがここにいるんだ？」

「んだよ、アタシがおかーさんと一緒に居ちゃいけないのかよ？」

そのラーハルトの疑問に答えたのはクイントではなくノーヴェエだった。ノーヴェエの言葉にラーハルトは「ああそういえば……」とある

ことを思い出した。

「（ノーヴェはスバルやギンガと同じでクイントの遺伝子で生み出されたんだっただな……）」

ならば遺伝子関係上、クイントを母親だと呼んでも不思議ではない。しかしノーヴェの口の悪さにラーハルトは間違いなく自分の知るノーヴェだと納得し、軽く溜息を吐いた。

「彼女はクイントくんの遺伝子を使って生まれた子だ。だから彼女の教育にはチンクと一緒にクイントくんにも手伝ってもらってるんだよ」

「まあ、私もこの子と同じ生まれ方をした娘が2人いるしね。性格は全然違うけど……」

そこまで言うくとクイントの顔が若干暗くなる。彼女が言う娘とは間違いなくスバルとギンガのことだろう。この研究所に来て2年間…公式にはM I Aとなつている彼女はいまだに家族と再会できる状況ではない。暗くなるのも仕方がないだろう。

「しかし…クイントの遺伝子を使うとは……」

「わかってるよ。だが最高評議会の老人たちはクイントくんの先天技能に注目していたからね。そのことについてはクイントくんも許してくれた」

申し訳なさそうにスカリエッティが呟く。クイントの先天技能…それは魔法で光の道を作る『ウイングロード』と呼ばれるものだ。それと同じような能力を得る目的で最高評議會はスカリエッティに

クイントの遺伝子を使うように命じたのだろう。

しかし幸いなことはノーヴェが生まれたここではスカリエッティは優しいし遺伝子上の母に当たるクイントもいることだろう。

「ノーヴェ、ラーハルト殿にその口の利き方はいかんぞ？ほら、しっかり挨拶しろ」

当のノーヴェは先程のラーハルトへの言葉でチンクにやんわりと叱られていた。ノーヴェ本人は納得がいかないようにしている。

「ナンバーズNo9、ノーヴェだ。よろしく……」

チンクに言われた通りにノーヴェは少々ぶつちよ面でラーハルトに挨拶する。それでもその表情に納得の色はないが……

「さて、ラーハルト殿。挨拶も済んだところでノーヴェの戦闘訓練に協力してほしいのだが……」

チンクがノーヴェを見ながらラーハルトに頼む。もちろんラーハルトに異論はない。もともとラーハルトはナンバーズの訓練の相手をしているの。……ノーヴェ本人が不満気な表情なのは別として。

「チンク姉、こいつそんなに強いのか？アタシにはそうは見えねえけど……」

ノーヴェはラーハルトを睨みながらチンクに文句を言う。そう言われたラーハルト本人は特に何かを言おうとはしない。ノーヴェはまだ目覚めたばかりなので相手の実力が分からないのはしょうがない。

「ふむ、チンク。今日のナンバーズとの模擬戦、ノーヴェには見学させておけ。直に見せた方が早いからな」

それから数時間、いつものナンバーズとの模擬戦となった。以前と同じように訓練場に集まったのはトーレ、クアットロ、チンク、デイエチ、セインが集まっていた。その傍らではノーヴェがクイント共に見学している。

「ではラーハルト殿……行きます！」

「来い……」

するとトーレがピオリムとバイキルトを自分にかけてラーハルトに突進する。

「その程度のスピードでは……」

「まだだ！」

「なに……！？」

さらにトーレはピオリムでスピードが上がった状態でさらに自身の固有技能であるIS『ライドインパルス』を発動させてさらにスピードアップする。

「なるほど……中々に速い……が！」

トーレの攻撃をラーハルトは魔槍で受け流して回避する。

「まだそのスピードに馴れていないな。それでは俺には届かん」

ラーハルトはさらにスピードを上げてトーレの首筋に魔槍を当てようとする。

「させない……ベギラマ！」

しかしそのラーハルトに向かってディエチが呪文を放つ。それをラーハルトは冷静に回避するが……

「まだだ、行くぞラーハルト殿！」

声のした方ではチンクが両手に呪文のエネルギーを溜めているところだった。その呪文がなんなのかラーハルトは瞬時に判断する。

「イオナズン……！」

『^{イオナズン}極大爆裂呪文』……^{イオ}爆裂呪文系の頂点の呪文である。その威力は数多くある呪文の中でも最上級のものであるが……

「はあ……はあ……はあ……」

その分、魔法力の消耗も激しく、今のチンクの^{レベル}技量では1発撃つのがやっとだった。それでも2年ほどで^{イオ}爆裂系の呪文を極めたのだから大したものだが……

「……イオナズンとは……驚かされたな。だがまだまだ呪文を使いこ

なせていないな」

巨大なクレーターが訓練室にできているがラーハルトはそこから少々離れたところに立っていた。恐らくイオナズンをしっかりと回避したのだろう。

「ですがまだ私たちがいますわ！」

「行くよ！マヒヤド！」

「メラゾーマ！」

すると今度はクアットロがメラゾーマを、セインがマヒヤドを放つ。共に火炎系、氷結系の最上位呪文であり、この2年間で2人が覚えた呪文である。

「いつも言っている。馬鹿正直に撃つても当たらんぞ」

しかしやはりラーハルトのスピードを捉えるには至らない。それ以前にいまだにクアットロたちはラーハルトの本気を引き出せていないのだが。

「くう！相変わらずすばしい！」

回避されながらもセインとクアットロは呪文で追撃する。もともとマヒヤドとメラゾーマはチンクが使ったイオナズンに比べれば魔法力の消費量が少ない。そのため2人にはまだ余裕があった。

更にそこに魔法力を使い切って脱落したチンクを除くトーレとディエチも加わってさらに模擬戦は激しくなった。もつとも、最終的に

は全員ラーハルトに撃墜されて終わったのだった。

一方、それを見学していたノーヴェは目を見開いて驚いていた。チンクが使ったイオナズンもそうだがナンバースが使用する呪文の威力の高さと5対1でありながらそれらを全て回避し、圧倒するラーハルトの姿に……

「どう、ラーハルトは？」

クイントは敢えてラーハルトについて訊ねる。さつきからノーヴェの眼が何よりもラーハルトを追っているのが分かっていたのだろう。

「すげえ……」

そしてこの模擬戦でノーヴェはラーハルトに憧れてラーハルトを『兄貴』と慕うようになったのだった。

このノーヴェが抱いた感情は『憧れ』であると共に『恋心』でもあったのだが……まだ子供なノーヴェがそれに気付くわけもなかった。

第5話 少女の焦り（前書き）

お待たせしました、更新です。

本作のノーヴェはヒロインだけあってかなり強くなります。

ちなみに本小説のルーは性格がすでにVIVIDです。

感想お待ちしています。

第5話 少女の焦り

ノーヴェが目覚めてからさらに2年が経過した。この2年、ラーハルトたちの活動は問題なく進行していた。

前線で動くメンバー、主にラーハルトやトーレ、チンクやゼストが来たる管理局への反乱のためにレリックと呼ばれるロストロギアを捜索していたりいくつかの違法研究施設を襲撃してそこで生まれた子供たちを管理局とは関係ない世界の孤児院に預けたり。

この違法研究所を潰して子供たちを孤児院に預けるとするのはプロジエクトFを生み出したスカリエツティなりの罪滅ぼしであった。

さらについて数日前にはノーヴェの妹に当たるナンバーズ11番、ウエンデイが目覚めた。彼女は姉に当たるノーヴェがラーハルトを『兄貴』と慕っているのを見て『ラー兄』と呼び始めた。それを見た無自覚にラーハルトに恋しているノーヴェは凄じ目つきでウエンデイを睨み、チンクに苦笑い混じりにやんわりと叱られていた。

ラーハルトの知識の中にある原作開始まであと4年。目覚めてからウエンデイも戦闘訓練を始め、今のところ全てが順調のように思えた。

そんな中でラーハルトは例の如く訓練室の扉をくぐり、ナンバーズやクイント、メガー又たちと訓練をしに来た。

「あ、お兄ちゃん！」

訓練室に入ってきたラーハルトに向かって紫色の髪の少女が駆け寄

つてくる。メガーヌの娘である『ルーテシア・アルピーノ』である。彼女はメガーヌがスカリエッツィに協力しはじめてからしばらくして研究所に連れてこられた。

その辺は管理局最高評議会が行った行動であり、『データ』としてスカリエッツィが提出したメガーヌが『レリックウエポン』の素養があるという情報になれば娘にもその素養があるのではないかとまだ2歳だったルーテシアを送ってきたのだ。

勿論、メガーヌに関してはスカリエッツィがあくまで『データ』として提出したものであり、実際は『レリックウエポン』にはなっていない。

ルーテシアを送ってきた最高評議会にはラーハルトを含め全員が嫌悪感を覚えたがルーテシアが母であるメガーヌと過ごせるのでそこまで悪いことではなかった。

「ルーテシア…相変わらず元気だな」

「ん〜」

苦笑いしながらラーハルトはルーテシアの頭を撫でる。一方のルーテシアはご満悦といった表情で目を細めている。ルーテシアはメガーヌと一緒にいることとスカリエッツィたちが家族同然に接していることで元気で優しく、そしてところどころはっちゃんけた幼女に育っていた。

「ノーヴェ！動きが止まってわよ！」

「ご、ゴメン！おかしさん！」

ラーハルトに撫でられるルーテシアに嫉妬の炎を燃やしていたノーヴェはクイントに叱られていた。ここまで嫉妬するのにノーヴェはいまだに恋心を自覚していなかったりする。

「ふふふふ」

「!?!」

さらにそんなノーヴェを見てルーテシアがニヤリとほくそ笑む。いろいろとルーテシアの将来が心配になるラーハルトとメガー又だった。

「ラー兄、ラー兄！見てほしいっす！」

するとウエンディがラーハルトに手招きする。ラーハルトがその方向に目を向けるとウエンディがスカリエッティが作った訓練用の的に向かって両手を突き出す。

「行くっすよ、メラ！」

ウエンディが叫ぶと手から小さな火の玉が放たれ、的に直撃する。

「ほう………」

その光景にラーハルトは感嘆の声を漏らす。呪文の中でも初級に位置するメラではあるが目覚めて僅か数日で呪文を放てるようになったのだ。一応ウエンディはいくつかの呪文の契約を行っているがもっとも相性がいいのは火炎^{メラ}呪文系が得意分野になるようだ

。もちろん、他の呪文が使える可能性もあるが……

「っ！？」

クイントと組み手をしていたノーヴェエの顔が強張る。実はノーヴェエは呪文が使えない。いや、正確には『攻撃魔法』が使えないのだ。

ノーヴェエは目覚めてからいくつもの攻撃魔法の契約を行なおうとしたがどれもうまく行かなかった。かつてのダイのように『契約ができて使えない』ではなく『契約自体がうまく行かない』のだ。

しかしノーヴェエは回復呪文や解毒呪文キアリーの契約は成功しているし使えてはいる。それでも直接攻撃に繋がる攻撃呪文やトーレのように自身を強化する補助魔法は一切契約できなかつたのだ。

しかも回復呪文系もホイミホイミまでは習得できたがウーノのように最高位の回復呪文であるベホマはウーノ本人に師事してもまるで習得できない。それがノーヴェエを焦らせていた。

確かにノーヴェエは回復呪文が使えるしウーノは基本的に前線に出ないので前線型のノーヴェエが回復呪文を使えるのは重宝するだろう。しかし攻撃呪文や補助呪文が使えないということはラーハルトや補助呪文で自身を大幅に強化できるトーレ、攻撃呪文が使えるチンクたちに比べて爆発力に欠けるのだ。

「ノーヴェエ、今日はここまでにしませう？」

そんな焦りを覚えていたノーヴェエにクイントが手を止める。ノーヴェエはクイントにストライクアーツを教わっていたがこのままでは訓練にならないと判断したのだ。

「え！あ、アタシはまだ！」

「そんなに焦ってちゃかえって危ないわ」

有無を言わさぬクイントの言葉にノーヴェは黙るしかなかった。

それから数日、ラーハルトとゼスト、ノーヴェがスカリエッティに呼び出された。スカリエッティによれば、ある違法研究所を潰してほしいということだった。

そこはプロジェクトFの研究施設でこそないが古代ベルカのユニゾンデバイスが実験を行われているということだった。

この違法施設襲撃にノーヴェが抜擢されたのはそろそろ実践を経験しても良いという考えがあったからだ。もちろん、ノーヴェは常にラーハルトかゼストと一緒に行動するということだ。

「ここだな」

「ああ……」

そして違法研究所にラーハルトたちが訪れた。今から違法研究所を襲撃するのだ。

「うう……」

一方、ノーヴェは初めての实战で緊張していた。それを見たラーハルトはいつものように無表情で、それでいて優しくノーヴェの頭を撫でる。

「ノーヴェ、お前はいつも通りに動ければ問題はない。及ばないところは俺がカバーする」

「兄貴……」

ラーハルトの気遣いの言葉もノーヴェをさらに緊張させるだけだった。ノーヴェにとってみれば初の実戦と言つこともあるがそれと同時に無自覚ではあるが恋心を抱くラーハルトとの共同ミッションである。

その頃、研究所ではクイントがスカリエッティに疑問をぶつけていた。

「どういつつもり？スカリエッティ」

「ノーヴェのことかい？」

スカリエッティも辛そうな顔でクイントを見る。クイントの顔は怒りに染まっていた。

「そうよ。確かにノーヴェは実力的にはもうAランクを超えてる。実戦の経験を積ませるのは良いと思うけど……今のあの子は攻撃呪文が使えないことを焦ってる。そんな状態じゃ普段の力を出せるとは思えないわ」

クイントの言う通り、ノーヴェは焦っている。攻撃魔法が使えないことに加えて目覚めて数日のウエンデイが初級とはいえ攻撃魔法を習得した。そのことが余計に焦りを助長していた。

「それはわかっている。しかしこれはラーハルトが言い出したことなんだよ」

「え、ラーハルトが？どういつこと？」

普段、無口で無愛想なラーハルトだが決してナンバーズを危険に晒すようなまねはしない。そのラーハルトが言い出したということは何かある。

「ラーハルトはノーヴェにはまだ目覚めていない力があると言っていた。そしてそれを目覚めさせるには実戦が一番だともね。とにかく私たちはラーハルトを信じよう。彼ならノーヴェを無事に連れ帰ってくれる」

そのスカリエツィの言葉にクイントは只々ノーヴェの無事を祈っていた。

閑話 陸戦騎の死 勇者の願い（前書き）

今回は本編ではなく融合する以前のラーハルトの話です。

オリジナル設定としてダイの大冒険本編の10年後となっています。

穴が多い駄文ですがよろしく願います。

感想お待ちしております。

閑話 陸戦騎の死 勇者の願い

これは……あの高校生の少年が通り魔から友人を庇って死ぬ少し前の話……

今から10年前、地上を恐ろしいまでの脅威が襲いかかった。『魔界の神』とまで呼ばれた『大魔王バーン』の地上侵攻である。バーンは魔界に太陽の光を与えるために地上を消し去ろうと考えた。

しかし、それは勇者とその仲間たちによって阻まれた。勇者は激闘の末にバーンを打倒し、地上に平和をもたらしたのである。だが、バーンに協力していた死神の用いた超爆弾『黒の核^{コア}』の爆発を防ぐうとして一時、行方知れずになった。

それから10年経ち、勇者は帰ってきた。そしてそれと同時に新たな世界の危機も訪れたのだ。かつて、勇者の父によって倒され、魔界に封印されたドラゴンの王『冥竜王ヴェルザー』の復活である。勇者は仲間たちと共にヴェルザーを倒すべく、魔界へと向かった。

荒廃した大地……轟く雷鳴……決して太陽が射すことがない漆黒の空……そこで1人の戦士の命が燃え尽きようとしていた。

「ラーハルト！しっかりしてくれ！」

1人の青年が血だらけで倒れた鎧姿の男性を揺する。青年の名は『ダイ』……かつて大魔王から世界を救った勇者である。そして倒れている男性の名は……『ラーハルト』。以前、ダイの父親である竜騎将バランに仕えた竜騎衆最強の男である。その周りには2人の仲間たちが集まっている。

「ポップ！ラーハルトに回復魔法をかけてくれよ！早く！」

「ダイ……」

緑色の服を着た青年、ダイの親友であるポップにダイは懇願する。確かにポップは大魔導士と呼ばれ、攻撃呪文・回復呪文の最高位が使える。しかし、回復呪文は対象者に生きる力が残されていないければ効果がない。ラーハルトにはすでに……

こうなった理由を言葉にするのは簡単だった。ヴェルザーとその配下たちとダイたちの死闘。その中でラーハルトはダイの盾になったのだ。その攻撃が呪文による攻撃ならば身に纏った鎧で致命傷にはならなかったかもしれない。しかし最悪なことにそれは直接的な攻撃だった。その攻撃は鎧を貫き、ラーハルトに致命傷を与えた。一方、ヴェルザーは一時撤退していき、今この場にはいない。

「お……やめください……ヴェルザーとの……戦いは……まだ終わっておりません……もはや助からぬ男に……これ以上の時間を割く必要は……ありません……」

ラーハルトは息も絶え絶えにダイを諫める。まだヴェルザーとの戦いは終わっていない。ならばもはや盾にもなれずに死んでいく自分

に重要な戦力であるポップの魔法力を消耗させるわけにはいかなかった。

「けど！けど！！」

しかしそれでもダイは諦められない。自分を庇って死んでいくラーハルトの姿は、今は亡き父・バランと同じだった。

「ふおおおお、思われておるのう」

そこにある1人の人物が現れた。その姿は老人……しかしダイの仲間たちは警戒し、身構える。

「そう警戒する出ないわ。わしは……神じゃ」

自身を神と名乗る老人。その老人にダイたちは訝しげな表情になる。

「……あなたが神なら……ラーハルトを助けられませんか？」

だがダイはそんな神に1人尋ねる。神なら死に瀕している仲間を救えるのではないかと……

「悪いがそれは無理じゃ……」

ダイの問いかけに神は髭を撫でながら即答する。しかし……

「……じゃが、こことは違う世界に転生させることはできる」

「転生？」

「どづいつことだよ？爺さん」

神の言葉に疑問符を浮かべながらポップが尋ねる。

「簡単じゃ。ここで死ぬのは変えられん。しかしここと違う世界で新たな生を得ることはできる。もともと今回はその話をするためにわざわざ来たんじゃない。ただし、その場合…お主には並行世界のお主と融合してもらおうかの」

「並行世界？」

聞きなれない言葉にダイたちは揃って疑問符を浮かべる。神は簡単に並行世界のことを説明する。そして一行がある程度理解したときに瀕死のラーハルトが口を開いた。

「…つまり…俺が…俺では…なくなると…いうことが…？」

「そうじゃな…人格も並行世界のお主と融合して新たな人格となる。じゃが、お主の記憶もそのまま残るからまるで別人になるわけではない」

神はそう言うが…ラーハルトは断る気だった。しかし……

「ラーハルト…転生してくれ」

「……ダイ…様？」

ダイの言葉にラーハルトは疑問の言葉を浮かべた。

「俺…今までラーハルトに助けられてばかりだった。だから…ど

んな形でもラーハルトが生きられるんなら……生きてほしい……生きて……幸せになってほしい……お願いだ……ラーハルト……」

涙を流すダイの瞳が真っ直ぐにラーハルトを射抜く。そしてラーハルトは目を閉じて涙を流した。自分のことを思ってくれているダイに……

「神とやら……好きにしろ」

「ふむ……では融合の時までお主の魂には眠ってもらおう。次に目覚めるのは融合が終わった後じゃ」

そしてラーハルトの意識は闇に落ちて行った。

「SIDE：ラーハルト」

「…き……兄貴！」

「ん？」

聞き覚えのある声で俺の意識が覚醒する。目を覚ました俺の視界に映ったのは赤い短髪の少女、ノーヴェだ。どうやら俺は転寝していたようだ。

「こんなところで寝てると風邪ひくぜ？」

「ふん…俺は人間のように軟じゃない……風邪などひかん」

俺はそう言いながら傍らに置かれた魔槍を持って立ち上がる。そのまま歩き出すとノーヴェも俺に連れ添って歩き出す。

見ていたのはあの時の……融合する前の戦士だった方の俺の記憶。融合したことによってその前の戦士だった俺に比べて甘くなったと感じている。だが…それもそれほど悪くはなかった。

この世界にダイ様も、 balan 様もない。それでも……

「おい！兄貴！早くこいよ！」

それなりに……護りたいものもできたからな……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4868s/>

魔法少女リリカルなのは～誇り高き竜に仕えた者～

2011年7月14日20時05分発行